愛知教育大学研究報告, 31(教育科学), pp. 181～191, February, 1982

集団分極化とその説明理論について

磯 崎 三 喜 年
Mikitoshi ISOZAKI

(心理学教室)

社会的影響過程の概念に示されるように(例えば, 鈴木, 1976), 個人と集団との相互の影響過程には, さまざまなものがあり, その具体的な生起事象も多岐にわたっている。

本稿では, 特に, そうした生起事象の1つと考えられる集団分極化 (group polarization) と呼ばれる現象について, これまでの研究を概観し, 個人事態と集団事態でなされる意思決定や意見・判断にどのような差異がみられるか, また, その説明はどのように考えられるかを検討する。

集団分極化とは

Risky Shift

集団分極化について述べるためには, まず, risky shift (危険性の高い方向へ決定が移行すること) と命名されている集団討議効果に言及する必要がある。risky shift が初めて見い出されたのは, Stoner (1961) の研究においてであるといわれる(Myers & Lamm, 1976). Stoner (1961) は, CDI (Choice Dilemma Items) と呼ばれる一連の架空の選択葛藤問題を用いて, 個人によってなされる決定と集団によってなされる決定との間に, どのような違いがみられるかを検討した。

Stoner が用いたCDIとは, 次の例に示されるようなものである。

"D君は, X大学のフットボールチームのキャプテンである。X大学は, その伝統のライバルY大学とシーズン最後の試合をしていた。試合は最終セコンドに入り, D君のいるX大学が負けている。X大学にもう1回プレーするだけの時間が残っており, キャプテンであるD君は, ほぼ確実と思われるプレーで同点に持ち込むべきか, あるいは, もし成功すれば勝利を手中にすることができるが, 失敗すれば負けてしまう複雑で危険性の高いプレーをすべきかの決定をしなければならない" (Pruitt, 1971)

こうした事例に対し, 被験者は, "あなたがD君にアドバイスしているところを想像して下さい。以下は, その危険なプレーが成功する確率です。どのぐらいの成功の確率があれば, その危険なプレーを行う価値があると思いますか" と尋ねられる。成功の確率は, 1/10から3/10, 5/10……と増大し, 確率がどうであれ, 危険なプレーを行うべきではないとするまで, そのアドバイス値は変化する。このうち1つを被験者は選択するように求められる。

Stoner は, 当初, 個人決定よりも集団の討論による決定の方が, 危険性の低い慎重なも

のになるだろうと仮定していた。この仮定の背後には，公的組織体における集団の保守性の考え方（例えば，Whyte, 1956）があった。

結果は，Stoner の予想に反し，個人で単独に決定した場合よりも集団討議を経た後の決定の方が，より risky な（危険性の高い）ものとなった。こうした，集団によってなされる決定が，個人の決定よりも risky となる現象が risky shift 現象である。その後の研究でも同様な結果が得られ(例えば，Wallach & Kogan, 1965; Wallach, Kogan & Bem, 1962, 1964), risky shift の一般性とその説明理論について，かなりの研究が行われるようになった。

しかし，Cartwright (1971) は，risky shift の研究が，CDIを用いたものに偏りすぎていることなどから，結果を一般化することに限界があると主張した。また，risky shift ばかりでなく，CDIの事例によっては，cautious shift（より慎重な方向へ決定が移行すること）が生起することから，risky shift に疑問を提出し，cautious shift の研究を行うことも必要であるとした。そして，risky shift に関する研究の興味が，主として，その現象を説明することにあったため，cautious shift については，それほど注意が払われてこなかったと指摘している。さらに，Cartwright (1973) は，risky shift の研究パラダイムの問題についても検討を加えている。

集団分極化

risky shift の概念が集団討議の効果を示すものとして不十分であることは，Cartwright (1971) の批判からも明らかであり，他の研究者によっても同様な指摘がなされている (Moscovici & Zavalloni, 1969; Pruitt, 1971).

Moscovici & Zavalloni (1969) は，男子学生のド・ゴール将軍に対する態度とアメリカ人に対する態度とを測定し，ド・ゴールに対し好意的で，かつアメリカ人に対し非好意的な男子学生に集団討議をさせた。その結果，ド・ゴールに対する好意度は，討論前に比べてさらに強まり，逆にアメリカ人に対する反発感は増大したことを見い出した。こうしたことから，Moscovici & Zavalloni は，個人の意思決定や判断に及ぼす集団の影響を，risky や cautious といった概念をも含むより広範な一般化した概念として，集団分極化と呼ぶことを提唱した。集団分極化とは，“集団討議後になされる集団反応の平均が，討論前に個々人によってなされた反応の平均よりも，討論前反応と同一方向により極端になって現われること”を指している。つまり，例えばもともと risky な傾向にある場合は，討論後さらに risky となり，逆に cautious な傾向のものはより cautious になるといえる。この集団分極化の概念は，Fraser, Gouge & Billig (1971), Gouge & Fraser (1972)にもみられる。また，Pruitt (1971) は，これと同様な意味において，集団誘発的移行 (group-induced shift) の概念を用いている。しかし，この新しい概念の導入により，risky shift や cautious shift の概念が無意味になったわけではない。むしろ集団分極化の概念によって，好み (preferences) や態度など，risky-cautious 次元にとどまらない広範な集団討議効果を扱うことが可能になったといえるだろう。Myers (1975) は，女性に対する態度などを集団に討論させたところ，Moscovici & Zavalloni (1969) でみられたと同様，集団がもともともっていた態度が強められ，分極化が生起したことを報告している。

CDIを用いた研究以外に，サイコロによる賭けを扱った Blank (1968) の研究，ブラッ

クジャックを用いた一連の研究 (Blascovich, Ginsburg & Howe, 1975; Blascovich, Ginsburg & Veach, 1975; Blascovich, Veach & Ginsburg, 1973) があり，いずれも risky shift が見い出されている。これに対し，競馬での賭けでは，むしろ cautious shift が報告されている（例えば，Knox & Safford, 1976; McCauley, Stitt, Woods & Lipton, 1973). また Sanders (1978) は，ブラックジャックにおいても，集団が個人よりも大きな賭け金を持っている場合には，競馬におけると同様 cautious shift が生起することを見い出した。

さらに，Kaplan (1977) や Myers (1978) は陪審判決 (jury decision) の問題で集団分極化を検討している。

この他，集団分極化の生起は，さまざまな問題領域において，また，実験室を離れた現実のフィールド事態でもその一般性が明らかにされている (Myers & Lamm, 1976; Lamm & Myers, 1978).

ところで，集団分極化は，他者の決定や判断が情報として与えられた場合でも生起し，集団討議後にのみ生起する現象と限られているわけではない（例えば，Blascovich, Ginsburg & Veach, 1975; Myers, 1978）。従って，前述の集団分極化の定義は，“集団経験後になされる集団反応の平均が，集団経験前に個々人によってなされた反応の平均よりも，集団経験前と同一方向により極端になって現われること”と言い換えることが可能である。ここでの集団経験とは，他者との討論などの直接的接触だけでなく，間接的な関わりをも含む広義の集団経験を意味している。

集団分極化の説明理論

責任の分散

集団分極化の説明として，まず，責任の分散 (diffusion of responsibility) の考え方があげられる。これは，個人で単独に決定を行う場合よりも集団の方が，決定によって失敗した際に感ずる責任の度合を減じることができることから，集団の方がより極端な risky 反応が生ずるとするものである（例えば，Bem, Wallach & Kogan, 1965; Kogan & Wallach, 1967; Wallach, Kogan & Bem, 1962; Wallach, Kogan & Burt, 1967 ）。

橋口（1974）は，5名からなる集団を構成し，集団内の意思決定者数が多いほど，その決定がより risky となったことを見い出した。これは，意思決定者数が多くなるほど，他の集団成員に対して感ずる責任の度合が小さくなり，責任の分散が生じたためと解釈される。さらに，Yinon, Jaffe & Feshbach (1975) は，集団の方が個人よりも，学習の誤りに対するフィードバックとして電気ショックを多く用いたことを報告している。これは，単に分極化の問題にとどまらず，自らの行為に対する正当化のメカニズムとして責任の分散が生じた結果と考えられる。Festinger, Pepitone & Newcomb (1952) のいう没個性化 (deindividuation) と類似した傾向が集団内に生起したと考えることもできる。

しかし，責任の分散による説明にはいくつかの批判がある。例えば，一方視鏡 (one way mirror) を通して，他の集団成員の討論を観察した状況においても，risky shift が生じたとする Lamm (1967) の研究，討論なしで，単に他者の判断を知っただけで risky shift が生じた Teger & Pruitt (1967) の結果は，責任の分散によっては解釈が難しい。Pruitt

(1971) の指摘するように，cautious shift の生起を説明できないことなど，集団分極化の説明理論としては，あまり妥当なものとはいえないように思われる。

集団分極化とは別に，援助行動の研究において，責任の分散説が提唱されている（例えば，Latané & Darley, 1970). Lamm & Myers (1978) の述べるように，責任の分散説は，援助行動の研究にみられるように，集団分極化の説明としてよりも，むしろその他の集団相互作用効果を説明する考え方として有効であるように思われる。

情報的影響

集団分極化の説明には，情報的影響 (informational influence) の考え方が有力な１つにあげられている。これは，Vinokur & Burnstein (1974), Burnstein & Vinokur (1977) などにみられ，集団事態において，他者の議論を聞くことにより，これまで自らの思いつかなかった考えを知ることができる結果，分極化が生起すると考える立場である。

討論の際，集団成員は問題を考えるにつれて，自らの好む議論あるいは自らを支持するような議論に目を向け，それを積極的に受け入れようとする傾向が増大すると推測される。こうした認知的バイアスの作用する可能性は，Festinger (1957, 1964) の認知的不協和の考えからも示唆される。従って，自らの信念と反するような議論を斥け，その説得性を低下させようとしたり，また，自らの好む方向への議論をより多く生み出そうとするかもしれない。さらに，Lamm & Myers (1978) の指摘するように，他者と意見交換や討論を行う際に，我々は，自らの考えを他者と一致したものにしようとする傾向がある。その結果，集団成員の持つ当初の支配的な反応傾向が強められると考えられる。Anderson & Graesser (1976) もこの情報的影響と類似の立場に立っており，討論を通してのそれぞれの集団成員のもつ情報量の増大が，集団分極化を引き起こすとしている。

情報的影響の考えを支持する研究はかなりみられる（例えば，Burnstein & Vinokur, 1975; Burnstein, Vinokur & Trope, 1973; Ebbesen & Bowers, 1974; Semin, 1975; Silverthorne, 1971; Vinokur, Trope & Burnstein, 1975）。しかし，議論のどういった特性が説得的たり得るかについては必ずしも明確ではない。

Vinokur & Burnstein (1978) は，妥当かつ目新しいと評定された議論が，より説得力のある議論として知覚されたことを明らかにし，なぜ議論が説得的たり得るかの示唆が得られたとしている。これは，内面化された態度変化の説明枠による解釈であるといえよう。

情報的影響の考え方に類似したものとして，Tesser (1978) の自己発生的態度変化 (self-generated attitude change) がある。Tesser によれば，集団分極化現象は，個人レベルにおける自己発生的態度変化が，集団レベルにおいて作用したことを示すものであるという。自己発生的態度変化とは，時間経過に伴う思考の増大により，自らの考えが明確化され，その結果，個人の持つもともとの意見や態度がさらに強められて，態度の分極化が生起することを指す。自分の好まない仲間について考える機会を与えられた被験者が，思考を妨害された被験者よりも仲間を好む度合が小さかったことを見い出した Sadler & Tesser (1973) の研究，政治的問題について思考する時間を与えられると，その問題に関する意見の分極化生起の度合が大となったとする Tesser & Conlee (1975)，さらに Tesser & Leone (1977) の研究などは，自己発生的態度変化を実証するものである。

Tesser (1978) は，自己発生的態度過程が集団分極化過程において媒介的な役割を果た

しているとし，その例証として Bateson (1966) の研究などを引用している。

Bateson (1966) は，討論を行わずに自らの最初の立場に関して考察を続け，内的に議論を生み出した被験者と，その問題を討論した被験者のいずれも，有意な分極化効果を示すことを見い出した。しかも，この2つの集団間にはその効果に何らの差異もみられなかった。

Tesser (1978) の考えは，集団分極化の生起についてもかなりの示唆を与えているように思われる。Berkowitz (1980) は，自己発生的態度変化について，次のような興味深い例をあげている。

テレビでプロフットボールチームの試合を観戦していた Joe は，フットボールの方略についてかなりの知識をもっていた。試合が大事な時期に入り，Joe は，そこでパスを試みるべきだと考えた。しかし，クオーターバックはパスを行わず，エンド・ランを要求した。この後，Joe は，このプレイをくよくよ考え，彼のクオーターバックの選択に対する態度はますます否定的なものになっていった。つまり Joe は，時間の経過とともに態度が分極化していったのである。

受動的な討論参加では集団分極化の生起は十分でなく，能動的な討論の方がより大きな移行を生じさせるとする主張 (Lamm, 1967; Bell & Jamieson, 1970) は，自己発生的態度変化の考えと軌を一にするものと思われる。

さて，情報的影響の考えは，すでに述べたように集団分極化の説明としてかなりの支持があるように思われる。しかし，批判的な研究もいくつかみられる（例えば，Blascovich, Ginsburg & Veach, 1975; Goethals & Zanna, 1979; Myers, Bach & Schreiber 1974). Blascovich, Ginsburg & Veach や Myers, Bach & Schreiber の研究では，討論はなされず，また議論の交換も行われなかったが，他者の反応が知らされただけで集団分極化が生起した。Blascovich, Veach & Ginsburg (1973) は，ブラックジャックを用いた研究において，集団討論は選択の移行に何ら役割を果たさなかったとし，同様に Blascovich, Ginsburg & Veach (1975) は，集団分極化の生起に必要なのは社会的比較であるとしている。

これに対し，Burnstein, Vinokur & Trope (1973) は，他者の反応を知ることにより，被験者自身が内的に新たな議論を喚起し，情報的影響と類似したメカニズムで反応の移行が生起するとの考えを提出している。つまり，他者の反応を知ることは，集団分極化の間接的な原因であり，被験者自身によって生み出される説得的議論こそが直接的媒介であると主張した。また Burnstein & Vinokur (1975) は，被験者が他者の立場を知り，関連議論を生み出した時には分極化が生起したものの，被験者が無関連議論を生み出したり，他者の立場を知らずに，問題の両方向への議論を生み出したりした場合には，分極化が生じなかったとしている。Burnstein, Vinokur & Trope (1973) の主張は，Tesser (1978) の考えに通ずるものであるが，他者の反応を知ることと個人が内的に議論を生み出すこととの結びつきは必ずしも明確ではないように思われる。

また，個人事態と集団での賭け行動を試行ごとに分析した Blank (1968) の研究において，いったん集団において生起した risky shift が，個人事態に戻った際に消失したことが明らかにされている。この結果は，内面化された態度変化を仮定する情報的影響の考え方とは一致しない。情報的影響のみで必ずしも十分な集団分極化の説明が可能であるとはいえないように思われる。

社会的比較

集団事態においては，自らの価値を高め，社会的に望ましい存在として自らを位置づけようとする動機づけが強まるとの前提から，集団分極化を説明しようとするのが，社会的比較 (social comparison) の考え方である（例えば，Baron & Roper, 1976; Cotton & Baron, 1980; Goethals & Zanna, 1979; Jellison & Arkin, 1977; Jellison & Riskind, 1970).

Jellison & Riskind (1970) は，risky shift を説明するために，Festinger (1954) の社会的比較過程理論 (theory of social comparison processes) の考えを援用している。Festinger は，人には自らを正確に評価しようとする動因が存在し，環境に適切に対処していくために，類似した他者との比較を試みるとしている。また，その仮説Ⅳにおいて，“意見の場合と異なり，能力の場合には向上性の動因 (unidirectional drive upward) が存在する”とし，さらに“能力の場合，遂行度が異なることは本質的に異なる価値をもつ……遂行度が高ければ高いほどより望ましい”と述べている。つまり，能力を高め，よりよく遂行することにかなりの価値が置かれることになる。従って，個人は能力連続体上において，彼が比較する他者の遂行よりもよりよい点へと志向すると考えられる。

こうした Festinger の理論を背景に，Jellison & Riskind (1970) は，riskyな選択を行い，それを成功させるためには，それだけ高い能力が必要だとの認知がなされると推測した。そして，1.唱導された risk の水準は能力の直接的な反映である。2.人々は，類似した他者に比べて，自らをその能力において幾分高いと知覚したいと考える，の2つの仮定を設定した。そして，選択する risk のレベルが高ければ高いほど，その個人の能力が高いと知覚されることを実験的に検証している。

さらに，Jellison, Riskind & Broll (1972) は，能力の高さが risk の度合と結びつくと被験者に知覚された場合には，高い risk を選択することが高い能力をもっていると知覚されたのに対し，偶然によって左右される課題だと告げられた場合には，そのような知覚がなされなかったことを見い出している。この結果は，能力の社会的比較の解釈に合致するものである。Zajonc, Wolosin, Wolosin & Sherman (1969) の研究もこの考えを支持するものといえる。Zajonc, Wolosin, Wolosin & Sherman は，被験者に，生起する確率の異なる課題，すなわち，一方には正確な判断がしにくい偶然課題，他方の被験者には正確な判断が可能な能力課題を与えたところ，前者の偶然課題状況においては，risky shit が得られなかったが，後者ではrisky shiftが得られたとしている。

また，risky志向の項目において，他者の risk の度合が自らの選択する risk よりも低いと認知する傾向のあることが，いくつかの実験で指摘されている（例えば，McCauley, Kogan & Teger, 1971; Myers, 1974 ）。これは先に述べた Jellison & Riskind (1970) の仮定２，比較他者よりも自らを能力が高いと知覚すること，の一つの証左と考えられる。この認知傾向は順序効果があり，自らの決定を行ってから，平均的他者の反応を評定する場合により強くみられる。しかし，こうした Jellison & Riskind (1970) の説明は，risky方向に偏っているきらいがある。

意見の極端さと能力への帰属の仕方を，社会的比較の観点から解釈した研究に Jellison & Davis (1973) がある。また，Jellison & Arkin (1977) は，能力の社会的比較の解釈からさらに，自己呈示 (self-presentation) に基づく集団分極化の説明を提案している。自己

呈示の考えは，個人の行動を社会的報酬や是認及び罰の随伴性に対する反応としてとらえる。自らをよりよく呈示し，他者に受け入れられんがために，集団事態において分極化を生起させると解釈する。Jellison & Arkin はその根拠として Blank (1968) あるいは Dion, Miller & Magnan (1971) の研究を引用している。Dion, Miller & Magnan は，集団を凝集性の高い条件と低い条件とに分け，高凝集性の条件においては，有意な移行が見られなかったが，低凝集性の条件で有意な risky shift が得られたことを明らかにした。これは，高凝集性の条件では自己呈示の必要がないのに対して，低凝集性の条件では他者に受け入れられんとする自己呈示の必要性が強まったためであると解釈される。

Jellison & Arkin にみられる自己呈示の考えは，方略的な色彩を強く帯びたものといえる。しかし，同じ社会的比較の立場である Cotton & Baron (1980) の批判がある。Jellison & Arkin (1977) は，“もし，意思決定過程においても完全な匿名性 (anonymity) が保障されたなら，分極化効果は生起しないであろう”と述べているように，是認や好意などの社会的報酬を最大にせんとする自己呈示の考えからは，必然的に，匿名の状況においては分極化が生起しないことが導かれる。Bell & Jamieson (1970) の研究では，公的条件において分極化が生起したのに対し，匿名の討論条件（被験者は質問紙に名前を記さず，また互いのテスト前の得点も知らされていない）においては，何らの移行もみられなかった。これは，Jellison & Arkin の予測と一致するものである。しかし，Cotton & Baron (1980) は，Bell & Jamieson の研究における匿名条件の被験者は，他者がどのような反応をしたかについて何らの情報も与えられておらず，匿名性の操作と社会的比較情報の操作とが交絡していると指摘した。従って，彼らの結果は曖昧なものになったとして，社会的比較情報を一定にした上で匿名性の操作を行い，Jellison & Arkin の考えを検討した。その結果，一部，Jellison & Arkin の予測と合致するデータが得られたものの，概して，匿名性の状況でも分極化の生起することが明らかにされた。Cotton & Baron は，この結果から，Jellison & Arkin の自己呈示仮説は妥当なものではなく，社会的比較のメカニズムそのものが最も重要だとしている。

磯崎・上野・天根・横川（1981）は，CDI を用い，実験前調査で得られたデータの平均値を被験者に呈示して，その後の反応の変化を検討したところ，匿名性の保障された条件において有意な risky shift が得られた。記名を求められ，かつ回答後に，自らの意見を公表してもらうと告げられた条件では，他者の平均値が与えられた場合でも有意な変化がみられなかった。この結果は，Jellison & Arkin (1977) よりも，Cotton & Baron (1980) の考えに近いものといえよう。

また，Baron & Roper (1976) は，自動運動の評定が大きいほど高い知能や能力と結びつくと被験者が考えたときに，集団事態でより大きな判断がなされたとして，社会的比較の機会が存在すること自体が，集団分極化生起の十分条件であると結論づけている。この結果は，Jellison & Arkin の自己呈示仮説からも解釈は可能であり，社会的比較のメカニズムそのものについて，今後さらに検討が必要であろう。

社会的比較の考え方には，上述したように Jellison 流のものと Baron 流のものとがある。しかし，いずれにせよ，社会的比較は，情報的影響とともに集団分極化の説明には欠かせない重要な考え方であると思われる。因みに，Sanders & Baron (1977) は，社会的比較と情報的影響は，互いに相補的な関係にあるかもしれないと述べている。

結　　語

集団分極化に関するこれまでの研究を概観し，その説明理論について考察した。報酬分配を扱った Greenberg (1979) の興味深い研究にもみられるように，集団分極化の生起は，かなりの一般性を有することが確認されてきている。

集団分極化の有効な説明と考えられる情報的影響と社会的比較は，ある意味で，社会的影響過程に関する Deutsch & Gerard (1955) の情報的社会的影響 (informational social influence) と規範的社会的影響 (normative social influence) の概念にそれぞれ対応しているといえるかもしれない。

こうした従来からのいわゆる社会的影響の説明枠とは別に次のような考えもある。Fromkin (1970, 1972) は，個人は，他者と単に類似した存在であることを望むだけではなく，他者との差異性 (distinctiveness) を希求する存在であるとして，独自性 (uniqueness) の概念を提唱している。そして，集団分極化にみられる極端さを，Snyder & Fromkin (1980) は，集団内での独自性の感覚を取り戻そうとする個人の試みの反映であるかもしれないと述べている。こうした Fromkin の考えなどは，今後の研究に有益な示唆を与えているように思われる。

（昭和56年8月29日受理）

引 用 文 献

Anderson, N.H., & Graesser, C.C. 1976 An information integration analysis of attitude change in group discussion. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 210–222.

Baron, R.S., & Roper, G. 1976 Reaffirmation of social comparison views of choice shifts : Averaging and extremity effects in an autokinetic situation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **33**, 521–530.

Bateson, N. 1966 Familiarization, group discussion, and risk taking. *Journal of Experimental Social Psychology*, **2**, 119–129.

Bell, P.R., & Jamieson, B.D. 1970 Publicity of initial decisions and the risky shift phenomenon. *Journal of Experimental Social Psychology*, **6**, 329–345.

Bem, D.J., Wallach, M.A., & Kogan, N. 1965 Group decision making under risk of aversive consequences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 453–460.

Berkowitz, L. 1980 *A survey of social psychology, 2nd* ed. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Blank, A.D. 1968 Effects of group and individual conditions on choice behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 8, 294–298.

Blascovich, J., Ginsburg, G.P., & Howe, R.C. 1975 Blackjack and the risky shift. II : Monetary stakes. *Journal of Experimental Social Psychology*, **11**, 224–232.

Blascovich, J., Ginsburg, G.P., & Veach, T.L. 1975 A pluralistic explanation of choice shifts on the dimension. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 422–429.

Blascovich, J., Veach, T.L., & Ginsburg, G.P. 1973 Blackjack and the risky shift. *Sociometry*, **36**, 42–55.

Burnstein, E., & Vinokur, A. 1975 What a person thinks upon learning he has chosen differently from others : Nice evidence for the persuasive-arguments explanation of choice shifts. *Journal*

of Experimental Social Psychology, **11**, 412–426.

Burnstein, E., & Vinokur, A. 1977 Persuasive argumentation and social comparison as determinants of attitude polarization. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 315–332.

Burnstein, E., Vinokur, A., & Trope 1973 Interpersonal comparison versus persuasive argumentation : A more direct test of alternative explanations for group-induced shifts in individual choice. *Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 236–245.

Cartwright, D. 1971 Risk taking by individuals and groups : An assessment of research employing choice dilemmas. *Journal of Personality and Social Psychology*, **20**, 361–378.

Cartwright, D. 1973 Determinants of scientific progress : The case of the risky shift. *American Psychologist*, **28**, 222–231.

Cotton, J.L., & Baron, R.S. 1980 Anonymity, Persuasive arguments, and choice shifts. *Social Psychology Quarterly*, **43**, 391–404.

Deutsch, M., & Gerard, H.B. 1955 A study of normative and informational social influences upon individual judgment. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 629–636. 佐々木薫（訳）1969 個人の判断に対する規範的及び情報的影響の研究 カートライト・ザンダー 三隅二不二・佐々木薫（訳編）：グループダイナミックス（第2版）I 誠信書房pp.241–255.

Dion, K.L., Miller, N., & Magnan, M.A. 1971 Cohesiveness and social responsibility as determinants of group risk taking. *Journal of Personality and Social Psychology*, **20**, 400–406.

Festinger, L. 1954 A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117–140.

Festinger, L. 1957 *A theory of cognitive dissonance.* Stanford : Stanford University Press. 末永俊郎（監訳）1965 認知的不協和の理論 誠信書房

Festinger, L. 1964 *Conflict, decision, and dissonance*. Stanford, Calif. : Stanford University Press.

Festinger, L., Pepitone, A., & Newcomb, T.M. 1952 Some consequences of deindividuation in a group. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **47**, 382–389.

Fraser, C., Gouge, C., & Billig, M. 1971 Risky shifts, cautious shifts, and group polarization. *European Journal of Social Psychology*, **1**, 7–30.

Fromkin, H.L. 1970 Effects of experimentally aroused feelings of undistinctiveness upon valuation of scarce and novel experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*, **16**, 521–529.

Fromkin, H.L. 1972 Feelings of interpersonal undistinctiveness : An unpleasant affective state. *Journal of Experimental Research in Personality*, **6**, 178–185.

Goethals, G.R., & Zanna, M.P. 1979 The role of social comparison in choice shifts. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 1469–1476.

Gouge, C., & Fraser, C. 1972 A further demonstration of group polarization. *European Journal of Social Psychology*, **2**, 95–97.

Greenberg, J. 1979 Group vs individual equity judgment : Is there a polarization effect ? *Journal of Experimental Social Psychology*, **15**, 504–512.

橋口捷久 1974 集団内の意思決定者数とリスク・テイキングの水準 実験社会心理学研究, **14**, 123–131.

磯崎三喜年・上野徳美・天根哲治・横川和章1981集団分極化現象に関する研究心理学研究, **52**,248–251.

Jellison, J.M., & Arkin, R.M. 1977 Social comparison of abilities : A self-presentational approach to decision making in groups. In J.M. Suls & R.L. Miller (Eds.), *Social comparison processes.* New York : Halsted Press, pp.235–257.

Jellison, J.M., & Davis, D. 1973 Relationships between perceived ability and attitude extremity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **27**, 430–436.

Jellison, J.M., & Riskind, J. 1970 A social comparison of ability interpretation of risk-taking behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, **15**, 375–390.

Jellison, J.M., Riskind, J., & Broll, L. 1972 Attribution of ability to others on skill and chance

tasks as a function of level of risk. *Journal of Personality and Social Psychology*, **22**, 135–138.

Kaplan, M.F. 1977 Discussion polarization effects in a modified jury decision paradigm : Informational influences. *Sociometry*, **40**, 262–271.

Knox, R.E., & Safford, R.K. 1976 Group caution at the race track. *Journal of Experimental Social Psychology*, **12**, 317–324.

Kogan, N., & Wallach, M.A. 1967 Group risk taking as a function of member's anxiety and defensiveness levels. *Journal of Personality*, **35**, 50–63.

Lamm, H. 1967 Will an observer advise higher risk taking after hearing a discussion of the decision problem ? *Journal of Personality and Social Psychology*, **6**, 467–471.

Lamm, H., & Myers, D.G. 1978 Group-induced polarization of attitudes and behavior. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, **11**, 145–195. New York : Academic Press.

Latané, B., & Darley, J.M. 1970 *The unresponsive* bystander : *Why doesn't he help*? New York : Appleton. 竹村研一・杉村和子（訳）1977 冷淡な傍観者 思いやりの心理学 ブレーン出版

McCauley, C., Kogan, N., & Teger, A.I. 1971 Order effects in answering risk dilemmas for self and others. *Journal of Personality and Social Psychology*, **20**, 423–424.

McCauley, C., Stitt, C.L., Woods, K., & Lipton, D. 1973 Group shift to caution at the race track. *Journal of Experimental Social Psychology*, **9**, 80–86.

Moscovici, S., & Zavalloni, M. 1969 The group as a polarizer of attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **12**, 125–135.

Myers, D.G. 1974 Interpersonal comparison process in choice dilemma responding. *Journal of Psychology*, **86**, 287–292.

Myers, D.G. 1975 Discussion-induced attitude polarization. *Human Relations*, **28**, 699–714.

Myers, D.G. 1978 Polarizing effects of social comparison. *Journal of Experimental Social Psychology*, **14**, 554–563.

Myers, D.G., Bach, P.J., & Schreiber, F.B. 1974 Normative and informational effects of group interaction. *Sociometry*, **37**, 275–286.

Myers, D.G., & Lamm, H. 1976 The group polarization phenomenon. *Psychological Bulletin*, **83**, 602–627.

Pruitt, D.G. 1971 Choice shifts in a group discussion : An introductory review. *Journal of Personality and Social Psychology*, **20**, 339–360.

Sadler, O., & Tesser, A. 1973 Some effects of salience and time upon interpersonal hostility and attraction during social isolation. *Sociometry*, **36**, 99–112.

Sanders, G.S. 1978 An integration of shifts toward risk and caution in gambling situations. *Journal of Experimental Social Psychology*, **14**, 409–416.

Sanders, G.S., & Baron, R.S. 1977 Is social comparison irrelevant for producing choice shifts ? *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 303–314.

Semin, G.R. 1975 Two studies on polarization. *European Journal of social psychology*, **5**, 121–131.

Silverthorne, C.F. 1971 Information input and the group shift phenomenon in risk taking. *Journal of Personality and Social Psychology*, **20**, 456–461.

Snyder, C.R., & Fromkin, H.L. 1980 *Uniqueness : The human pursuit of difference*. New York : Plenum Press.

Stoner, J.A.F. 1961 A comparison of individual and group decisions involving risk. (Unpublished master's thesis, Massachusetts Institute of Technology) Cited in D.G. Myers & H. Lamm, 1976. The group polarization phenomenon. *Psychological Buttetin*, **83**, 602–627.

鈴木康平 1976 社会的影響過程について 心理学評論, **19**, 151–171.

Teger, A.I., & Pruitt, D.G. 1967 Components of group risk taking. *Journal of Experimental Social Psychology*, **3**, 189–205.

Tesser, A. 1978 Self-generated attitude change. In L. Berkowitz (Ed.) *Advances in Experimental Social Psychology*, **11**, 289–338.

Tesser, A., & Conlee, M.S. 1975 Some effects of time and thgouht on attitude polarization. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 262–270.

Tesser, A., & Leone, C. 1977 Cognitive schemas and thought as determinants of attitude change. *Journal of Experimental Social Psychology*, **13**, 340–356.

Vinokur, A., & Burnstein, E. 1974 Effects of partially shared persuasive arguments on group-induced shifts : A group problem-solving approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **29**, 305–315.

Vinokur, A., & Burnstein, E. 1978 Depolarization of attitudes in groups. *Journal of Personality*, **36**, 872–885.

Vinokur, A., Trope, Y., & Burnstein, E. 1975 A decision making analysis of persuasive argumentation and the choice-shift effect. *Journal of Experimental Social Psychology*, **11**, 127–148.

Wallach, M.A., & Kogan, N. 1965 The roles of information, discussion and consensus in group risk taking. *Journal of Experimental Social Psychology*, **1**, 1–19.

Wallach, M.A., Kogan, N., & Bem, D.J. 1962 Group influence on individual risk taking. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **65**, 75–86.

Wallach, M.A., Kogan, N., & Bem, D.J. 1964 Diffusion of responsibility and level of risk taking in groups. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **68**, 263–274.

Wallach, M.A., Kogan, N., & Burt, R.B. 1967 Group risk taking and field dependence-independence of group members. *Sociometry*, **30**, 323–338.

Whyte, W.H., Jr. 1956 *The organization man.* New York : Simon and Schuster.

Yinon, Y., Jaffe, Y., & Feshbach, S. 1975 Risky aggression in individuals and groups. *Journal of Personality and Social Psychology*, **31**, 808–815.

Zajonc, R.B., Wolosin, R.J., Wolosin, M.A., & Sherman, S.J. 1969 Group risk taking in a two-choice situation : Replication, extension, and a model. *Journal of Experimental Social Psychology*, **5**, 127–140.